

多種多様、淡水魚たちの生態と生活史 淀川水系魚類名鑑

希少野生動植物保存推進員
横山 達也

ムギツク

Pungtungia herzi

熱帯魚かと思うほど、日本の淡水魚のなかでは美しいコイ科の淡水魚・ムギツクが今回ご紹介する魚です。近畿地方（福井県、三重県、淀川水系）より西の本州、四国、九州が本来の生息地ですが、近年、関東地方にも移入され定着しています。口先がとがっているのが特徴で、口には2本のひげがあります。最も大きな特徴は、口先（吻部）から尾鰭のつけね（基底）まで、体に沿って1本の太い黒色のライン（縦帯）で、稚魚はこの



人に慣れてくると、金魚のように餌をねだるようになる

ラインに加えて各鰭がうすい橙色になり、さらに美しい姿です。それが観賞魚としての人気が高い所以です。全長10数cmにまで成長し、おもに河川の流れの緩やかなところで生息しています。通常、数尾の群れで行動しているのが観察されることもあります、



警戒心が強く、石の下や水草等に隠れていることが多く、陸上からは容易にみつけられません。しかし、水中で潜水しているとムギツクの名前の由来にもなった、「麦を突く」ような「コツコツ」という音が聞こえてくれば、姿が見えなくても「このあたりにいるかも」と知らせてくれます。この音は、水生昆虫や藻類など、石をつつきながら食べる時によく聞くことができ、食性は動物食の強い雑食性です。繁殖期は春で、石の下、水草等に卵を産みつけます。同じ淡水魚のオヤニラミやドンコ、ヌマチチブ、ギギなどに托卵することが知られており、独特の繁殖様式です。丈夫で飼育しやすく、ぜひ飼育していただきたいお勧めの魚です。

under the water

the waterside

the sky & land

水辺の

虫眼鏡

川に棲む水生生物の魅力的な生態

環境省 環境カウンセラー 川島 大助

トビケラのなかま

秋が深まり、これまで陸上で活動していた昆虫たちの姿も減りつつありますが、水中では夏よりも多くの水生昆虫が活動しています。今回ご紹介するトビケラ類もトンボ（幼虫：ヤゴ）のような幼虫期は水中、成虫期は陸上で過ごす水生昆虫です。トビケラ類の幼虫はイモ虫のような形で、種類により様々な生活型をしています。例えば『携巢型』と呼ばれるトビケラ類は、幼虫期にみの虫のように落葉や石、砂で巣をつくり、天敵の魚などから身を守ります。色んな材料でつくる巣は粗雑なものから精密な巣まで様々です。



オオシマトビケラ
(左) 幼虫 (右) 成虫



(左) オオシマトビケラの造網型の捕獲網
(右) ヤマトビケラの小石の巣



一方、『造網型』と呼ばれるトビケラ類は『携巢型』とは全く違い、川底にクモの巣のような捕獲網をつくり、網にかかった餌を食べます。石と石の間に張った網は川底の石同士をガッチリと接着し、人の力でも石を動かすのが大変なほどです。造網型のトビケラ類は川底を固めるため、川底の安定度合の指標にもなります（造網型が多い＝大雨による川底の攪乱が少ないなどが推測されます）。川の環境が変化すると、移動力のある魚類は棲みやすい別の場所へ移動できますがトビケラ類などは魚のように移動できないため、環境の変化には敏感です。そのため河川調査では水生昆虫を対象とした調査（＝底生動物調査）は重要な調査項目にもなっています。

the worst 100

花想鳥感

四季折々、
水辺の生物多様性

芥川緑地資料館 主任学芸員
高田 みちよ

干潟の生きもの

淀川は明治時代に度重なる氾濫の対策や大型船の船運のために、大きく改造されてきました。その最大の工事は新淀川の開削です。江戸時代の淀川は、大川、安治川、中島川など、たくさんの小河川に分岐して大阪湾に注いでいましたが、オランダの技師ヨハネス・デ・レーケによって、現在の淀川大堰（毛馬）の上流部から直線状に新淀川がつくられました。私たちがJR、阪急、阪神電車の車窓から見る淀川は、明治時代に掘られた人工河川です。同時に海岸部は埋め立てが進み、淀川河口部は人工的につくられた護岸によって固められています。



多様な生物が生息する
海老江干潟



汽水域で
美しい姿を見せる
ハマエンドウ

そのような淀川河口部ですが、淀川大堰から下流にはごくわずかに干潟や砂浜が存在します。JR京都線付近と淀川河口右岸には、人工的に復元された干潟があります。阪神電車本線の上流左岸の海老江地区には自然に形成された砂浜があります。ここでは大量のシジミが生息し、知る人ぞ知る潮干狩りポイントになっています。塩水を含む砂浜、干潟にすむゴカイやカニなどを狙って、シベリアからオーストラリアまでを旅するシギやチドリ類などの旅鳥も翼を休め、たっぷり餌を食べて休憩します。植物ではハマエンドウやシオギクなどの塩水性の植物もごくわずかに生育しています。みなさんも、大阪湾北部にわずかに残る干潟に出かけて、淀川下流部で生きものを観察してみたいかがでしょうか。

侵略的外来生物

1回
休み

淀川ワースト100

私は現在、近畿大学大学院で「ゼゼラ属魚類の保全分類学的研究～琵琶湖・淀川流域の魚類多様性解析と保全を目指して～」というテーマで研究しています。従来、日本にゼゼラ属は1種しか知られていませんでしたが、一連の研究で当流域に新種が生息することを発見し、2010年にヨドゼゼラ *Biwia yodoensis* として発表しました。ヨドゼゼラは遠く離れた前人未到の地から発見されたわけではなく、日本でもっとも古くから人が住み、現在は日本有数の大都市である大阪や京都を流れる淀川から発見されたことは注目に値します。これは、私たちに身近な当流域の生物多様性の豊かさを改めて表すだけでなく、長い時間を通して人と自然とが良好な関係を築いてきたことを示しています。



淀川に生息する
希少なヨドゼゼラ

今回は当コラムをお休みして、ゼゼラ属魚類を研究している川瀬成吾さんをご紹介。生きものが大好きな爽やか好青年、ヒト科の中の希少種です。

淀川管内河川レンジャー 石山 郁慧



しかし、今日の当流域では、人間活動の増大によって当流域の風土に適応・進化してきたヨドゼゼラはじめ多くの在来種が激減し、外来種が蔓延しています。この事実は、当流域の原風景、すなわち果てしない時間をかけて進化してきた生きものどうしの関係、生きものと人が作り上げてきた関係が大きく損なわれていることを意味します。原風景をとりもどすためには、まず私たちが自然のことをよく理解しなくてはなりません。そして、関係の修復および新しい関係を築いていく必要があります。私は、今の研究を通じて（発展させて）少しでも地域の生物多様性の解明・保全に貢献していきたいと考えています。

執筆 川瀬成吾